作者簡介

林麗容

一、學　歷

嘉義市垂楊國民小學畢業
嘉義市縣立玉山初級中學畢業
嘉義市嘉義女子高級中學畢業
臺北縣輔仁大學歷史學學士學位
臺北市國立臺灣師範大學歷史學碩士學位
法國巴黎第四大學西洋歷史學碩士學位
法國巴黎第一大學國際關係博士前期學位
法國巴黎第四大學歷史學博士前期學位
日本東京大學哲學博士候選人
法國巴黎第一大學國際關係博士候選人
法國巴黎高等社會科學研究院社會學博士候選人
法國巴黎第四大學歷史學博士學位
法國巴黎第一大學政治學博士學位

二、留　學

日本東京大學－中國哲學研究所
法國巴黎索爾本大學－歷史學研究所、國際關係研究所、經濟學研究所、政治學研究所
法國巴黎夏爾特大學院－法國歷史學研究所
法國巴黎高等社會科學研究院－社會學研究所
美國加州大學－教育學研究所

三、遊學與研究

美國－柏克萊大學教育研究中心（2001 年 6 月－8 月）
德國－柏林哥德語言文學研究中心（2002 年 6 月－8 月）
俄羅斯－加里寧格勒人文與觀光研究中心、聖彼德堡市容與社會研究中心（2006 年 7 月－9 月）

四、藝術專長

佛朗明哥舞、肚皮舞、踢踏舞、歐洲歌劇、國際聲樂、古典流行歌、通備武術、太極拳、巴西森巴舞、臺灣民謠、美姿美儀與美容化妝。

五、經　歷

真理大學觀光休閒學院「世界文化與觀光」、「觀光社會學」與通識教育學院「社會科學概論」、「歷史方法」、「國際關係」、「社會分析」、「文學與藝術」、「研究方法」、「日本多元文化研究」、「歐盟多元文化之研究」、「瑞士多元文化剖析」、「義大利的美食與文化圈」、「西班牙的海鮮與佛朗明歌舞之研究」、「德國文化與浪漫主義」、「越南文化型之研究」、「法國文化研究」等專任助理教授。
國立臺灣師範大學「歐洲文化與觀光」和「臺灣史地導遊與觀光」助理教授・國立臺

灣師範大學法語中心「法語」助理教授・Alliance Française「法語」助理教授・輔仁大學「歷史與思考」和「西方歷史人物評析」等助理教授・國立臺北大學「中日關係史」、「法國史」、「瑞士史」等助理教授・長庚大學醫學院「西方歷史人物評析」和「中西醫學史」助理教授。輔仁大學「中國通史」和「臺灣史」講師・東吳大學「中國通史」講師・國立臺灣工業技術學院（今日的國立臺灣科技大學）「中國近現代史」講師・淡水工專（今日的真理大學）「中國近現代史」講師・光武工專（今日的北臺灣科學技術學院）「中國近現代史」講師。北一女高中「歷史」教師、復興高中「歷史」教師、強恕高中「歷史」、「英文」、「日文」專任教師、東山高中「歷史」教師、及人國中「歷史」教師、興福國中「歷史」教師。嘉義水上萬能工商「國文」、「英文」、「數學」等專任教師。

臺北市臺灣基督長老教會謝禧明牧師「教育秘書」、宜蘭縣羅東鎮陳五福醫師「史懷哲之友會秘書」（1980 年麗容負責主辦在臺北市的「史懷哲之友國際大會」，開幕式邀請當時臺北市長李登輝先生蒞臨演講）、臺北縣新莊高中第十屆、第十一屆、第十二屆等三屆家長會副會長。

2003 年－2007 年任臺灣留法比瑞同學會理事長。

2004 年 12 月參選臺北縣立法委員・2005 年 12 月參選臺北縣縣議員。

六、專長領域

語言能力－英國話、日本話、法國話、韓國話、德國話、西班牙話、義大利話、拉丁文、俄國話、阿拉伯話、匈牙利話、越南話、泰國話、中國話、臺灣話。

社會科學－歷史學、政治學、社會學、教育學、經濟學、文學、宗教學、哲學。

專研領域－法國歷史與文化、德國歷史與文化、瑞士歷史與文化、義大利歷史與文化、西班牙歷史與文化、法國教育問題、法國社會問題、國際關係、中國史、中國哲學、中日關係史、史學方法、臺灣史、臺灣史地導遊、法國巴黎導遊、歐洲文化與觀光、世界文化與觀光。

七、專　書

林麗容：《民國以來讀經問題之研究（1912－1937）》，臺北：華世出版社，1991 年，236 頁。

Lin Li-Rong, Marianne, *La question chinoise du Second Empire à la IIIe République, 1856-1887*, Lille: Université de Charles de Gaulle-Lille III, 2001, 508 p.（林麗容：《法國從『第二帝國』到『第三共和』之中國問題研究（1856－1887）》，法國里耳：戴高樂大學－里耳第三大學出版，2001 年，508 頁）

林麗容：《西方見聞錄》，臺北：三民書局出版社，2004 年，258 頁。

林麗容等著：《Social Science 社會科學概論》，臺北：景文書局，2005 年，288 頁。

林麗容：《痕：夢回巴黎》，臺北：潘朵拉出版社，2005 年，480 頁。

林麗容：《臺灣一聲雷》，臺北：上大聯合出版社，2007 年，156 頁。

林麗容：《瑞士文化史研究》，臺北：五南圖書出版股份有限公司，2008 年，380 頁。

林麗容：《歐洲研究論集》，臺北：上承文化有限公司，2009 年，400 頁。

林麗容：《論「文化碰撞」之瑞士》，臺北：上承文化有限公司，2009 年，98 頁。

Marianne Lin（林麗容）：「L'étude du mouvement étudiant français de Mai 1968（1968 年

5 月法國學生運動再研究）」，臺北：上承文化有限公司，2009 年，106 頁。
林麗容：《世界文化與觀光》，臺北：上大聯合股份有限公司，2009 年，217 頁。
林麗容：《法蘭西文化之研究》，臺北：上承文化有限公司，2010 年，262 頁。
林麗容：《國際社會學》，臺北：上大聯合股份有限公司，2010 年，126 頁。
林麗容：《世界旅遊文化》，臺北：上大聯合股份有限公司，2010 年，242 頁。
林麗容：《中西歷史方法研究》，臺北：上大聯合股份有限公司，2010 年，114 頁。

八、現任

真理大學通識教育中心「社會科學概論」、「歷史方法」、「瑞士多元文化剖析」、「法國文化研究」與觀光休閒學院「世界文化與觀光」等專任助理教授。

中文提要

讀經在歷代政府尊崇重視下，研讀聖賢典籍乃成為中國歷代士人必經之人生歷程。因此經學得以保有其至高無上的特殊地位，在世代交替中發揮其影響力。

隨著中體西用思想的開展，清廷的教育改革，雖仍欲保持經學之獨尊地位，終以不合時勢之需求，遭致各方的反對與責難。宣統三年，中央教育會議決議廢除小學讀經時，仍因保守分子的激烈反對，以及中央政府的不表支持，終告失敗。由此開啟民國元年教育部廢經學之契機。自辛亥革命成功後，隨著新思潮的衝擊與中國社會結構的改變，進一步的教育改革，乃成為必然之舉。

在蔡元培出掌教育部後，鑑於清朝之教育宗旨與學制課程俱已不符合民國時代之需求，遂著手教育改革。在教育改革中，陸費逵與『教育雜誌』實扮演著推動的角色。隨著政府的北遷，政權亦淪入袁世凱手中，在袁氏帝制的野心下，尊孔與讀經亦告復活。隨著北伐的勝利，國民政府乃有統一中國教育的政策產生，其具體措施即是以三民主義思想貫徹於教育宗旨之中，自此而後，中國之教育發展與變革乃有規範可循，甚至部分地方軍政首長如何鍵、陳濟棠、宋哲元等，由於深感赤禍與日寇的威脅，亦欲藉此激勵民族精神來加以對抗。如胡適與陳濟棠之公開衝突，即可作為新舊學者讀經論爭的導火線。

『教育雜誌』自清末以來，即執中國教育研究之牛耳，至此階段在主編何炳松的積極策劃下，乃向全國教育家徵稿，對讀經問題加以徹底的檢討。大部分有留學外國的經驗，所學則以教育、國文兩學門最多，然而其他學科之參與者亦不少，使此問題能得到各種角度之討論。以職業而論，參與者則以教育界居多，其中尤以大專教授為主，而使此論戰之素質由是提高。至於參與者之地區，則大多集中於上海、南京、廣州、北平等城市。

然而在論戰的過程中，對於藉由經書瞭解中國文化之本源一點，亦曾取得雙方的共識。因此如何在課程改革中適切地安排經書之角色與地位，亦成為未來讀經問題之新課題。在此論戰中，由於折中調和之意見居多，頗能反映出國人傾向中庸的心態。

日文提要

中国思想史において経学の形成と変化は、中国思想を形造ると共にその性格を規定する主たる原動力である。経書を読むことは、歴代の読書人が必ず通らなければならない重要な過程の一つであった。しかし、このような経学独尊の状態は、近代の中国と西洋との接触の過程の中で揺れ動くこととなった。西洋文明の衝撃に対して、伝統的経学は抵抗の作用を発揮することができなかったために、その輝きはだんだん色あせて調和の段階に入った。

中体西用論の展開に従って、清朝の朝廷の教育改革も大きな影響を受けた。そのまま経学の特権的な地位を維持しようとしたが、結局時代の流れの要求に合わなかったために、いろいろ反対と非難に遭遇することになった。にもかかわらず、宣統三年（1911）に中央教育会議が小学校の「読経」（儒学の経典を読むこと）廃止を決議した時には、やはり保守分子が激しく反対し、中央政府もそれを支持しなかったため、実施されたのは、民国元年、中華民国教育部の下においてであった。辛亥革命が成功した後、新思潮の衝撃と中国の社会構造の変化によって、教育の改革は必至の形勢となり、蔡元培が教育部部長（文部大臣）になった。清朝の教育の宗旨と学校制度の課程では、民国の時代の要求にぴったり符合しなかった。そこで、陸費逵などが協力して、読経の課程と孔子を祭祀する礼を学校の規則から削り取った。この時の教育改革においては、陸費逵と『教育雑誌』が推進の役割を演じた。民国政府が北京に移るとともに、政権は再び袁世凱の手に落ちた。袁世凱の帝国制度を復活したいという野心が、「尊孔」の儀式（年に一度孔子を祀る習慣）と学校での読経を再復活させた。つまり、尊孔の実施によって、「皇帝」になるための地固めを行ったのである。これは重要なエピソードである。袁世凱の帝制が失敗した後に、黎元洪が大総統を継承すると、学校の読経は再び廃止された。しかし、読経を主張する気風は衰退しなかった。例えば、徐世昌、段祺瑞、張作霖などが続いて政治を牛耳る時代にも中央政府が読経の設置を提唱したことがある。地方政府においても軍閥のコントロール下にある時、又読経が主張された。そこで、読経を提唱することがこの時期の特色になった。

国民党の北伐戦争の勝利とともに、国民政府は中国を統一する教育の政策を採用した。具体的には三民主義の思想を、「教育宗旨」（指導要綱）にとり入れた。その後の中国における発展と変革は、この教育宗旨の規範をめぐり歩くことができた。この時期に中国共産党が抵抗したり、日本の軍閥が侵略したので、中国は艱難辛苦の危局に臨んでいた。この状況下で、国民政府は政略上「安内攘夷」の措置を取り、そして、多くの種類の文化運動を提唱して、国民の愛国の情操と自強の信念を高揚せしめた。中国教育界においては、教育変革のよって、国家的危機から脱出を計ろうとする者が現れた。そこで、連続して「教育救国」の討論を展開した。甚だしきに至っては、一部の地方の軍政リーダー、例えば、何鍵、陳濟棠、宋哲元などは中国共産党と日本軍が国民政府に対する脅威を与えると考えた。そこで彼らも民族精神を鼓舞するために、中国共産党と日本軍に対抗し、読経の設置を提唱した。このように読経の提唱は一部の保守学者の支持を獲得したが、教育学者がそれを非難したので、読経問題をめぐる論争が発生した。広東では胡適と陳濟棠の論争が公開され、これをきっかけに上海では『教育雑誌』を論争の

主戦地として読経論争が展開された。

『教育雑誌』は清末に創刊されて以来、中国の教育問題を研究する支配的な地位に立ち、非常に重要視された。民国二十四年（1935）まで、編集長何丙松の計画下で、専門家に原稿を募り、主に読経問題について徹底的に検討した。読経問題は民国初期以来、すでに何度も学者の論争を引き起こしてきた。そこで各地の学者たちはこの問題を重視するようになり、自ら進んで今回の検討に参加した。読経問題はあらゆる角度から問題点を検討することができた。討論者の態度と主張を含んで分類し、帰納したのが以下の諸派で、即ち、「絶対賛成読経派」、「相対賛成読経派」、「相対反対読経派」、「絶対反対読経派」、「綜合派」などであった。平均年齢は「絶対賛成読経派」の主張者の年齢が最も高かった。しかし、「絶対反対読経派」の主張者の年齢は最も若かったわけではない。これは注意すべき現象である。職業としては教育者が多数を占め、大学教授が主となった。参加者の地域分布に至っては上海、南京、広州、北京などの都市に集中した。これは中国文化の地域分布と関係があった。

この時期の読経論争の中で、「絶対賛成読経派」は即ち、伝統派の系統から発展してきた。「相対賛成読経派」と「相対反対読経派」は調和派の系統で、「絶対反対読経派」は西化派の系統である。民国建立の初め、西化派と伝統派という新、旧争いが最も激しくなった。五四運動以後、だんだん折衷の路線を発展してきたのは調和派である。以上の三つの派の主張は、又各時期の環境と要求が変わると変更され。且つそれらが継承していた思想も違いがあった。伝統派は「保守主義」の思想を継承し、西化派は「自由主義」の思想を継承した。調和派は「中体西用」の思想を発展させた。

この三つの思想は読経問題の核心をめぐって対立し、「読経問題」は更に複雑な問題になった。論戦の中心理論の二つの側面：一つは「原理原則論」で、もう一つは「実用価値論」である。

「原理原則論」の中心は即ち、「相対賛成読経派」と「相対反対読経派」の読経論戦の中心となっていた「本位文化主義」であった。「絶対反対読経派」の主張する「文化的自由主義」、「絶対賛成読経派」の「文化的保守主義」等は議論全体の中心とはなっていなかった。「文化的自由主義」、「文化的保守主義」等は「絶対反対読経派」、「絶対賛成読経派」の議論の中心であったものの、議論全体の大勢はしめていなかった。「相対賛成読経派」と「相対反対読経派」は経書を読むことを適度に採用するという、いわゆる調和論者である。彼らは当時の主流の地位を占めた。そのメンバーは読経論争の中で一番多くそのうえ、多くの人は「新知識分子」であった。全ての参加者を総合して見ると、大部分が外国への留学の経験を持っていた。中でも教育学、中国文学の研究をした人が多かったが、他の研究をした人も今回の論議に参加していた。「新知識分子」という人々とは大部分、欧米や日本への留学生で、「教育学」と「心理学」という二つの知識を持つ。彼らは当時の教育に対して積極的に働きかけ、これが当時の学生の心理的需要に応え、教育の効果を発揮することができた。原理原則価値論の働きは「整合」（integration）である。即ち、「西洋文化」と「中国文化」を折衷して、一つの新しい「理想」を作り上げることができる――「方法、機能の統合」（the synthesis of operation and function）。更に「本位文化主義」を発展し、中国の「当時、当地の需要によって、適度に西洋文化と中国文化を採用する」。これは当時の読経問題を解決した。

「実用価値論」も読経論戦の中心である。当時、「絶対賛成読経派」や「相対賛成読経派」、「相対反対読経派」、「絶対反対読経派」等が中心としたテーマは、「中、小学校は読経をすることができるのか」であった。皆、いろいろな見解を提出したが三つの実用価値の論題に帰納することができる：

（1）国家にとって、読経は救国の目標を達成させることができるのか。

（2）社会にとって、固有道徳と固有知識、並びに才能を回復し、腐敗した社会の気風を挽回させることができるのか。

（3）教育にとって、学校の読経は当時の教育の偏向を矯正し、欠点を直すだけの効果があるのか。

若し、以上の答えが肯定であるとすれば、民国二十六年（1937）に何故日本によって中国は侵略されたのか。それには中国教育の実施現況を深く理解することが必要である。民国二十二年（1933）に呉俊升は大公報で「新教育の理論と実施の価値を再び見積もて定める」を発表した。彼の「中国には一つの哲学が必要である」の文には中国人が中国の固有文化と当時の社会を必ず考察し、そして一つの普遍の哲学を確立すると書かれている。呉氏の見解は「本位文化主義」と似ている。彼は、すべて教育に頼って国難を救うことはできないとする。そこで、「本位文化主義」の主張は多くの人の支持を獲得する。主に国民の民族観念を養成し、及び国民の民族の自信を回復するのは当時としては重要なことであった。そこで、その時「修身」と「道徳」は学校で強調されるところとなり、それは知識教育に入って、「実学」になった。

つまり、論戦の参加者は彼らの思想と主張を総合して論じ、読経の賛成者が読経の課程に細密な計画や明確な目標を持ち、そして国家の文化の危機の挽回策を講じて救済することを呼びかけた。最近台頭してきた教育学者は読経に反対したので、読経問題について論戦を挑み続けた。結局、読経の主張は挫折したが、しかし読経論戦の過程のおいて、「経典によって、中国文化の『本源』を理解する」という点に関しては、読経賛成者と読経反対者との双方の認可を受けた。経典にはそのような働きがあったということが分かった。他の書籍をもって取って代ることはできないのである。そこで、読経問題の討論を再開し、如何に教育課程の改革の中に適切に経典の役割や地位を位置づけるかということ、これが新しい課題となった。又当時の論争中、読経の折衷案を主張した意見が最も多く、これは中国人の中庸の道の考えを反映したものであったが、このような傾向の考え方によっては読経問題は根本的な解決を得ることができない。そして、読経問題は情勢に従って、性格が変化していった。このことは、民国時代の読経問題の特色として重要視すべきである。

序

「讀經問題」是民國以來教育史上的一件大事，也是民國政治史上的一件大事。可惜竟無學者多加以研究，以致迄今尚未有問津者，這實在是一個不應有忽視的問題。

「讀經問題」從表面上看來，雖是中、小學生是否應該讀經的問題；實際上所涉及的層面相當地廣泛，其中涵蓋自清末以來中西文化論戰的問題，傳統派與現代派之爭，乃至新舊思想衝突的問題，因之而有贊同派、反對派及折衷派，非僅自清末以迄抗戰時期的爭論不休，甚至政府撤退來台以後，還曾一度有人舊事重提，引起一陣餘波盪漾。

讀經一事，原本是一個見仁見智的問題，教育界與學術界的論辯已夠熱鬧，想不到竟又與政治扯上關係，因之增加其複雜性。不但民初時期北方的軍閥如袁世凱、徐世昌、段祺瑞、張宗昌、張作霖等輩，企圖以尊孔讀經爲護符，並以傳統儒學來對抗新思想。北伐以後，國民黨政府也曾因內憂外患日益嚴重，冀憑藉傳統文化建設國民的新思想。如當時所推行的儒教復興運動、新生活運動以及中國本位文化運動，都與此一中心理念息息相關。此外，還有幾位地方上的軍事強人，如山西的閻錫山、冀察的宋哲元、湖南的何鍵、廣東的陳濟棠等提倡讀經，有他們自己的一套想法。推崇儒學，有的想以之抵抗帝國主義，有的想以之阻止共產思想，眞是五花八門，令人眼花撩亂。其中的細節，翻閱本書即可知曉，毋庸於此贅述。

麗容在讀大學時，即是我的學生。其後進入師大歷史研究所，又選修我的課程。因而對於她的勤勉好學和進取精神，留有極爲深刻的印象。這個題目經過麗容數年的努力下，大作因而能完成。其後，麗容又前往日本與法國經過十數年的學術的歷練，終於獲致今日豐碩的成果，殊足令人快慰，是爲序。

王家儉　于師大歷史研究室

民國 99 年 1 月 18 日

目次

序……序 1
前　言……1
第一章　讀經問題之源起……3
第一節　歷代經學之轉變……3
一、清代以前經學之演變……3
二、清代經學之發展……6
三、中體西用觀念之開展……9
第二節　清末教育改革與讀經論爭之初現……11
一、清末之教育改革……11
二、清末讀經存廢之論爭……22
第二章　民初讀經論爭之延續（1912－1928）……29
第一節　民元廢經之探討……29
一、知識階層結構之重組……30
二、影響廢經的時代思潮……31
第二節　孔教運動與讀經之恢復……34
一、孔教運動與讀經……35
二、袁世凱時期尊孔讀經之恢復……38
第三節　讀經廢續與軍閥之提倡……41
一、讀經再廢與存續……42
二、軍閥提倡讀經……45
第三章　讀經論戰之高峰與發展（1928－1937）……49
第一節　抗戰以前之教育改革……49
一、三民主義教育宗旨之建立與特質……49
二、祀孔之廢除與恢復……53
三、內憂外患下的文化建設……54
第二節　讀經觀念之復現與論戰之爆發……59
一、讀經觀念之復現與倡導……59
二、讀經論戰之引發……68
第三節　讀經論戰之高峰與轉變……70
一、讀經論戰之高峰——《教育雜誌》……71

二、倡導讀經之發展及其衰微
——陳濟棠、何鍵、宋哲元 …… 74
第四章　讀經論戰之分析 …… 81
第一節　讀經論戰之人事分析 …… 81
第二節　讀經論戰之派別與主張 …… 110
一、學校讀經宜從小學開始 …… 110
二、經書是我國先哲心傳之不朽傑作 …… 111
第三節　讀經論戰中心理論之剖析 …… 116
一、中心論與邊陲論 …… 116
二、實用價值論 …… 118
第五章　結　論 …… 121
徵引書目 …… 123
附　表
表 1-1：學校系統表（一）——欽定學堂章程 …… 13
表 1-2：學校系統表（二）——奏定學堂章程 …… 14
表 1-3：奏定學堂章程初等小學堂必修科課程表 …… 17
表 1-4：奏定學堂章程高等小學堂必修科課程表 …… 18
表 1-5：奏定學堂章程中學堂必修科課程表 …… 19
表 4-1：論戰人事資料表 …… 82
表 4-2：論戰人數統計表 …… 94
表 4-3：論戰年齡統計表 …… 94
表 4-4：論戰籍貫分佈表 …… 96
表 4-5：論戰學歷分析總表 …… 97
表 4-6：論戰學歷分析略表 …… 99
表 4-7：論戰就學各國表 …… 99
表 4-8：論戰學門分類表 …… 100
表 4-9：論戰職業分類表 …… 101
表 4-10：論戰所在地統計表 …… 103
表 4-11：論戰所屬機關表 …… 104
表 4-12：論戰所屬社團表 …… 106
表 4-13：論戰與教誌關係表 …… 107